

保津川下り

外国人観光客が多く訪れる嵐山。その嵐山を終点とする「保津川下り」の歴史は古く明治の初めに遡ります。

今回は明治末期から昭和初期にかけて京都を中心とした名所・風俗等を撮影した[黒川翠山の写真資料](#)から考察してみましょう。

「保津川下り」は以前盛んであった、木材を筏に組んで運ぶ「筏流し」の船頭が経験に裏づけされた技術を駆使して観光船を巧みにあやつり安全に運航してきました。

そのスリルと絶景が明治期の英国人写真家の目にとまりました。ハーバード・ポンティングは日本中を旅し写真を撮影して英国に持ち帰り魅力的な日本を紹介しています。

彼が記した旅行記「この世の楽園・日本」には保津川下りの様子が目の前に広がるかのような表現で紹介されています。本文を引用すると、

『今までにも急流を何回か下ったことがあるが、この川の美しさと滝を流れ下るときの興奮は、何度行っても決して飽きることのないほどすばらしいものだった。一面に木の茂った山と山に挟まれた岩の多い谷間を、音を立てて流れる狭い流れと穏やかな流れが入り交じるこの川では、常に何かしら新鮮な美しさと新しい秘密を見出すことができるのだった』

『自然や女神が一番機嫌のよいときに飾り立てた、この国で最も美しい場所』

『身軽さにおいても機転のきくことにおいても、舟を操る技術においても、私は世界中でこれ以上優秀な人たちを見たことがない』

<「[英国特派員の明治紀行](#) 第4章保津川の急流」より>



<音を立てて流れる狭い流れ>



<緩やかな流れ>

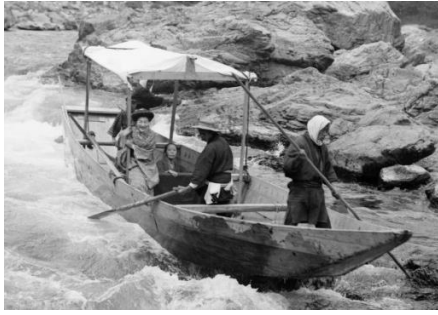
この様に英国人の想像力をかきたてる表現が外国人観光客を呼び寄せる結果となったのでしょうか。今回ご紹介している黒川翠山撮影写真資料にも保津川下りに興じる欧米の紳士・淑女らしき乗船客を見てとることができます。



洋服姿に帽子の姿はなんとも優雅な川下りに映りますが、急流ではどんな表情だったのでしょうか。

「笑顔」？それとも「悲鳴」？

日本人の御婦人は「笑顔」だったようです。



あなたも保津川下りで満面の笑みを浮かべてみませんか？

* 写真はいずれも [黒川翠山撮影写真資料](#)より

(2017年10月18日公開)